



看護部近年の取り組み

— 看護支援システム稼働 —

看護部長 大政 信子

平成20年にオーダーリングシステムを導入後、平成21年にはフィルムレスとなりました。今年は看護支援システムの導入を図り、10月から稼働しています。

イントラネット使用時はパソコン使用者が一部の者に限られていたため、オーダーリングシステム導入時の混乱を心配していましたが、考えていたより早く軌道に乗せることができ、看護師は転記作業から開放され、患者様の待ち時間も軽減されました。フィルムレスの導入では、看護部サイドのメリットとしてフィルムの整理・運搬・管理が簡略化され、業務のスリム化につながりました。今回導入した看護支援システムは、主にデータ集計等の記録に関する業務の効率化におい

て恩恵を受けています。今後は、セーフティチェックの導入を予定しています。これは、薬液取扱い時のヒューマンエラーを回避することで、患者様の安全を確保することができ、看護師による安全確認に一役買うこととなります。

当院は、病院全体で看護師の定着に取り組んでいます。ワークライフバランスを重視した働きやすい職場作りを継続していくことで、看護師自身が公私共に充実した生活を送れるようにしっかりサポートしていきます。働く看護師に精神的なゆとりがあると、患者様に対して優しく接することができ、安全な看護の提供につながります。個人個人が意識し

て明るい気持ちで生き生きと働くことができる環境を整えるよう取り組んでいきたいと思っています。そして、そのことが地域に貢献する病院につながっていけば良いと考えています。



海外出張報告

ステノ実践糖尿病学チーム 研修コース2010に参加して



内科(糖尿病・内分泌)
医長 新谷 哲司

この夏に薬剤師の阿部、管理栄養士の櫛部、看護師の宇高とともにデンマークのコペンハーゲンで行われたステノ実践糖尿病学チーム研修コース2010に参加してきました。

これは日本糖尿病財団が企画したもので、我が国において糖尿病診療に力を入れている10施設から医師、薬剤師、栄養士、看護師など4名の糖尿病チームスタッフが選択され派遣されました。ステノ糖尿病センターでの実践的な糖尿病診療スキルの習得を目的としたもので今年初めて実施された研修企画です。



研修中は写真のセットを渡されて毎食前、眠前にインスリン注射、服薬をするように指示されました。元来不精である筆者は全然指示を守ることができず、提出時に大変恐縮することになりました…。コンプライアンス不良の患者になりそうです。

ステノ糖尿病センターはアメリカのジョスリン糖尿病センターと並び称される、糖尿病領域における臨床・研究の国際的な中核となる施設です。その施設で診療スキルを学ぶことができるとのこと、大変期待して参加してきました。

その研修の内容はステノ糖尿病センターでの食事療法、薬物療法、足治療、治療への動機付け法などを、それぞれの専門家のレクチャーの他にワークショップ、ディスカッション、実技体験などの様々なワーキング手法を用いて習得するものでした。研修全体を通して実際の患者教育にもあたっている教育コンサルタントでもある心理学者が進行しており大変理解しやすい内容でした。

また、研修のはじめに血糖測定器や試験紙、インスリン(本当は生食)、薬剤(本当はお菓子)を渡されて、研修期間中には毎食前、眠前に血糖測定、インスリン注射、服薬をするように指示されました。患者教育を行うためには患者の立場になって考えることが必要であり、

今回の研修中に患者の疑似体験を試みるのが目的だったようです。

いうまでもなく糖尿病治療の柱となるのは食事療法、運動療法、薬物療法です。しかし、その治療効果を得るためには患者教育が必須であり、糖尿病診療の成否は患者教育にかかっているとさえいえます。(誤解している方も多いのですが、決して薬物療法で治療する疾患ではないのです。)その患者教育の実践は医師の力だけでは困難であり、看護師、薬剤師、栄養士、検査技師、理学療法士などの糖尿病チームスタッフの力が重要です。その点でも、今回の研修コースで当院の若手スタッフとともに国際的に最先端の施設での研修を受けることができたのは大変良い機会だったと思います。

このような機会を与えてくださった院長先生や、また快く留守番を引き受けてくださった諸先生方には大変感謝しています。今回の研修で得た内容を今後の診療に還元していくべく、これからも努力してまいります。

ステノ糖尿病センター正面で。左より新谷、宇高、岩本安彦 東京女子医大教授(日本糖尿病財団理事)、櫛部、阿部。

